

望月

聞いてくれ。たたかいに明け、たたかいに暮れるくらしのなかで、覚えがあるだろうあんた（寛）も、たとえば夜討ちをかける前の張りつめた思い。藪や茨のなかで長いこと待つ。飯は炊けぬ、火を燃やせぬからな。時折り腰の武者袋をさぐって干飯をとりだして噛む。味のないものだ。のどに通らぬものさ、はじめは。しかし馴れる。一人前の武者になるんだ。（また爪びきはじめる……）馴れることにしかし私は長いことさからってきたよ。しかし馴れる。ふと武者であることの生き甲斐さえ覚えることがある。

——そう気がつくとき、やはり悪い気持ちはせぬものさ、武者である以上、武者らしい武者でありたいという子どものような欲望はやはり抑えにくいものだ。だが、そこでたとえば勝ちいくさのあとのうたげの席で、私はやはりたまらなくなるのだな。矛盾しながらたたかったことより、その矛盾による苦しみに馴れたことに。無限の繰り返し。無限の苦しみ。それを背負うために私は信仰に入ったのか？……私は折ったよ、平和がほしかった。すべてを解決するものは果てしないいくさの完全な終わりだと思った。平和だと思った。（間）その平和がくるのだな、いいよ。……すべてが変わるのだろうか、これから。……（烈しく）だからさ、だからなのだ。これから、私はどうやって生きて行けばいいのかね。これまで、私は苦しみを、矛盾を、日がな夜がな、いわば食べて生きてきたんだ、敵を前にして火のたけぬ夜に噛みしめる干飯のように。そのにがい味が私の、とりもなおさず、生きているあかしだったのだ。私は平和を烈しく望んできたよ、たしかに。しかしその平和のなかに、寛さん、私は生きられるのかね。生きる資格があるのかね。

寛

おれは行く。先日望月もちづきとも話し合つてきめたことだ。聞け、おれの話はなしを聞け。……おれはなにも、おれが武士だったから、関ヶ原で西軍くみに与してたたかつた豊臣恩顧の大谷吉継の家臣だったから、行く、というんじゃない……あれから十四年、いまさら豊臣に忠義立てでもねえ。……ただよ、いま、おれは武士だった、といったな？……そうさ、おれは生まれて十九年武士だったさ。しかし関ヶ原から十四年、おれはなんだ？……おれはお前らといつしよに泥棒もした、関ヶ原残党の多くがそうになったようにな。押しおしがりゆすり詐欺さぎたかり、ツツモタセまでやつたなお霧、お前むすめが娘らしくなつてからは。百姓には、やはりなれなかつた。詮議せんぎがきびしかつたからな、いつか佐助のいったように。……追われ追われて食いつめて、殿との、いまはツツモタセに乗せそこなつたあなたの居候いそうろうだ。毎日あたりの土地を開墾かいこんしたり、真田紐さなだひもを組んだり、売つたり、その日の飯はどうやらやつと。……幸村公ゆきむら、ご好意には感謝しています。しかし、この生活は、いったいなんだ、ここで私は、結局なんなのだと思うんですよ。私はもはやけつして武士ではない、しかし百姓ではない、商人あきんどでもない、つまり、なんでもない。私は耐えられないんですよ。この生活に、この生活がいつまでつづくのかわからないことに。ぜいたくな望みかもしれない。しかし私は、私がやはり、なにかでありたい。なにかこう、はつきりした、ちゃんときまつたものでありたい。そうでなければ生きにくい、息がつけない。……決心したんですよ私は、ひとりでも大坂方に参加すると。だが、私はあなたにもきてほしい。隊長として、私たちを指揮してほしい……（幸村寝たまま）